



〈研究〉我國商業教育史とシーボルト : 我國最初の商業學校創立計劃者シーボルト

武藤, 長藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 36(5):735-748

(Issue Date)

1924-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053652>



我國商業教育史とシーボルト

(我國最初の商業學校創立計劃者シーボルト)

武 藤 長 藏

一

我國商業教育の歴史に就ては今日までに出版されたる書籍雜誌に之を敘述したるものあり。例へば(一)明治三十三年十一月發行故横井時冬先生著『日本商業史維新後の商業史』第六十一章商業教育、(二)商業大辭書所載水島鍊也先生稿商業教育、(三)明治四十五年七月發行經濟大辭書第四冊收録、上田貞次郎擔當執筆『商業教育』(四)大正二年五月發行故島田三郎氏編『矢野二郎傳』(五)大正十一年二月發行商學研究第一卷第三號所載法學博士佐野善作先生編『日本商業教育略史』等あり。

尙其他日本商業教育史の參考資料に就ては佐野博士が『日本商業教育略史』の序文中に重なる參考資料として掲げられしもの十四種あり。又此調査を助けられし商學士増地庸治郎氏より予が直接傳聞せし處によれば大阪の商業教育に就ては大阪商業學校一覽(明治十七年頃)(大阪高商所藏) 大阪府廳の書類あり、神戸に就ては初代所長甲斐織衛氏保管の書類、兵庫縣會史(明治三十五年頃發行)(兵庫縣廳所藏)等ありと云ふ。

而して右に例示せし我國商業教育史參考資料のいづれにも獨逸人ドクトル、フィリップ、フランツ、フォン、シーボルト (Philipp Franz Von Siebold) (西曆一七九六年我寛政八年に生れ、西曆一八六六年我慶應二年死す) が我國最初の商業學校創立計劃者たりし事を少しも記述する事なし。

二

大正二年五月發行故島田三郎氏編『矢野二郎傳』所載「矢野二郎年譜」明治八年の部に曰く

此年二月米國 府萬國博覽會事務取扱命ぜらる、五月該事務を關澤清明に引繼ぎ九月歸朝す、十月本官を辭す、森の歸朝するや率先して商業教育の必要を唱へ自ら一小私塾を京橋區尾張町に設け命名して商法講習所といふ。實にこの年八月のことにして本邦商業學校の濫觴なり(矢野二郎傳第十五頁より第十六頁)

次に同島田氏編『矢野二郎傳』九「商法講習所の創立」と題する部に曰く

森有禮は毎事時に先だつの意見を立つる人なり、鎖攘の急潮全國に漲るの時代に、早く海外留學生の列に入りて英國に赴きたる人なり、刀劍を武士の魂と信じたる者尙多き時代に於て、廢刀の建議を爲したる人なり、率先して内地雜居を唱へ、又、一夫一婦の説を立てたり、其米國に在るや、英語を折衷して我通用語とせよと主張せり、其所説奇矯往々適切ならざるものありしと雖も、其急進々歩の性格を有し、自信に厚く邁往勇進、他の區々たる批評を憚りて徘徊躊躇せざるの氣象は超凡の人と謂はざる可からず、斯人が米國にあること數年、齎し歸りたる意見の一は商業教育の開發論なり、彼謂へらく米國の強大は其富資の充實に在りて、富資充實の源は有爲有識の人材が實業界に馳騁して功名を此方面に立つるにあり、我日本が人材を政治の一方に傾けて、其教育も亦政治法律軍事文學に偏重し、農工の教育を輕視し、特に商業を全く教育範圍の度外に置くは、時代の要求に副へる方針にあらずと、急進の性質を有せる彼は之を當路に建言して、商業學校を創立せしむるの志あり、歸國の際

之を米人に計議しホイットニーを聘するの豫約をなしたり、既にして其意見を政府に告ぐるも空言として容れられず、米人は約を履みて來れり、森は帝國の公人なり、先に公使として國家を代表せし紳士なり、自己の信用と帝國の面目とに對して之を中止する能はず、京橋區尾張町一煉瓦屋の階上を僦りて、此に卑近の商業教育を授くることとせり、當時の通語に従ひ商法講習所と稱す、此事明治八年八月に在り、是れ我國商業學校の濫觴にして、大小高下各種の學校、皆、明治政府の設置に成りて、次第に民間に布及し、教育が施政の要務として經營せられたる史蹟中、獨、商業教育が民間に發源し、溯りて常路を啓發し、先覺者の辛苦努力により、汎濫淳著漸次全國に瀾漫して、今日の盛況を見るに至りしは、我國教育史上に大書すべき特色なり。

右に引用せし故島田三郎氏編『矢野二郎傳』中の記述が假令矢野二郎氏の傳なればとて矢野氏と森有禮氏との我國商業教育史上の一大功績のみを敍述するに急にして商業教育史上他の史的事實を看過し一方に片寄りたる嫌ある事は次に引用する横井時冬先生著書、上田貞次郎氏稿『商業教育』及佐野博士編纂『日本商業教育略史』等に據るも明也。尙茲に附記すべきは矢野氏は最初英語を長崎人森山多吉郎、西吉十郎等より學びたる事にして矢野氏が西洋文明に接觸理解し他日或は外交官となり或は商業教育家となりし緣由も夫れに初まる事は看過すべからず。(島田氏編矢野次郎年譜萬延元年の部參照)

三

明治三十三年十一月發行故文學博士横井時冬先生著日本商業史維新後の商業史第六十一章商業教育と題するはじめに曰く、

維新後歐米の制度を移して我邦の商業を改良したるもの少からざれどもまづ第一に着手せられて最も廣く行はれしは銀行業な

りとす、されば銀行業はあらゆる商業の模範となり大概銀行に倣ひて改良せらるゝ有様なりしかば従ひて商業教育の萌芽も銀行事務講習の目的より發生し來れり。

明治五年我政府の國立銀行條例を發布せらるゝや俄に銀行事務を講習せしむるの必要起りしかば七年四月大藏省銀行課中に銀行學局を開き在横濱の東洋銀行の書記たりし英國人アレキサンドル、アルレン、シャンドを雇入れて十名の官費生に簿記學、及經濟學銀行必須の諸學科を教授せしめしもの實に我邦に於ける商業教育の濫觴なりとす。

(横井博士著維新後の商業史、
第八十七頁—同第八十八頁)

右引用せし横井時冬氏の所論は明治八年八月森有禮氏創立の商法講習所より約一年前明治七年四月に設けられたる大藏省銀行課内銀行學局より筆を起したる點に於て、又、銀行業が廣義の商業の一種にして新式の商業教育を必要とせしが故に夫れに對する特種教育の必要起りし事は注意すべきこと也。

この銀行學局の事は島田氏編『矢野二郎傳』には記する處なし、蓋し矢野氏に關係なきが爲なるべしと雖も、我國商業教育の歴史上は看過すべからず、新しく設立されんとする銀行業に従事するものに新式商業教育を必要とせしが如く後節に述べべきシーボルト先生計劃の一大商業會社が其附屬として長崎に商業學校を設け、會社に働く人材養成を必要とせし事は想像に難からざるべし。

四

上田貞次郎氏は明治四十五年七月發行經濟大辭書第四冊收錄「商業教育」の項目を擔當執筆し其概論と題する部分のはじめに曰く

商業に關する學校教育の起源は甚だ新しきものにして、歐米にありても、凡そ四五十年前より始まりしものと見て差支なかるべし。我國にてはいふまでもなく、維新以後のことなり。其以前には何れの國にても徒弟制度に依り専ら實地の經驗のみに訴へて商業界の後繼者を養成し、學問的修養としては唯讀書・算術の能力（英國にては Reading, Writing and Arithmetic を合せて three R といふ）を得ば足れりと爲したり。

上田氏稿「商業教育」四、日本の商業教育一沿革の部に曰く、

維新の改革は封建の舊制を打破して、士族の特權を奪ひ、外國との交通を開いて盛に西洋の制度文物を輸入したりしかば、商業界に於ても銀行、海運を始めとして種々の新事業の發達を促し、此等の事業に必要な人物は到底之を舊來の商人中に求むること能はざるが故に、政府に於ても頻りに士族の實業を獎勵し、從つて士族の子弟を主として教養する所の學校の必要を感じるに至れり。彼の福澤諭吉氏の慶應義塾の如きは別に商業教育を標榜せずと雖も、英語を以て經濟學・歴史・地理等の實業的學科を教へ、人を導くに獨立自尊の精神を以てしたる結果は、自ら實業界に立ちて新事業の衝に當るべき幾多有爲の人物を輩出せしむることとなりたり。實に明治二十年頃より以前にありては慶應義塾は官吏養成所たる帝國大學と相對して殆ど唯一の商業實業學校たるの觀ありしなり。（經濟大辭書第四冊第一八四四頁より一八四五頁參照）

上田氏が日本商業教育史中に福澤諭吉先生創立經營せし慶應義塾の事に着眼せしは一つの見方なり。横井氏の著書には福澤氏の慶應義塾に就て云ふ處なし上田氏は福澤氏が明治六年『帳合之法』を出版せし事而して此書が我國にて出版の最初の簿記法の書物なる事又簿記法は商業教育上最も重要な科目なる事等に就ては一言をも費さざりしが予の傳聞する處にして誤なしとせば、福澤先生の門下生中經濟學の外に簿記法の心得あるものが三菱の如きに入り實業界の人となりしと云ふ、故莊田平五郎氏の如き即ち夫也と云ふ。これ注意すべき事柄也。而して福澤氏は米國出版の英文簿記

書を原本として『帳台之法』を著せしものなるが、予の發見せし處に依れば既に幕末に西曆一八三年（我天保四年）和蘭出版 W. Oudshoff 氏著伊太利式（商業）簿記法が我弘化四年（一八四七年）既に我長崎出島に輸入され居りし事は拙稿『明治以前長崎に傳はりし蘭文簿記書』（國民經濟雜誌第三十卷第一號）に述べし處の如し。されば英文の米國出版簿記書よりも蘭文簿記書が早く我國に傳はりしは注意すべき也。次に福澤氏の面識ある獨逸人シーボルト先生が夙に長崎に商業學校創設の計劃を有せし事も興味ある事なり。

〔附註〕 西洋經濟學の傳來と福澤氏の關係に就ては拙稿「スミスの名、其生涯、及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書」

參照（大正十三年一月發行經濟論叢第十八卷第一號「アダム・スミス記念號」所載）

次に上田氏が前に引用せし如く『商業に關する學校教育の起原は甚だ新しきものにして歐米にありても凡そ四五十年前より始まりしものと見て差支なかるべし』と述べしは歐洲商業教育史上正確なる記述にあらず。

獨逸ハンブルク（Hamburg）に於ける Prof. Joh. Georg Büsch の經營せし商業學校（„Hamburgische Handelsakademie”）は十八世紀の中葉千七百六十八年の創立也。

〔附註〕 H. Schumacher 著 Weltwirtschaftliche Studien 收錄 Weltwirtschaftliche Aufgaben im Unterrichtswesen und in der Wissenschaft 中 G. I. Eigenart und Bedeutung der Handelshochschulen と題する講演第五百八十二頁參照

Theodor Blum 著獨逸商業教育論（Das deutsche Handelsschulwesen）第百三十七頁 XXXIV Frei Stadt Hamburg（部參照）商業算術及簿記術の發達商人たらしめするものに對する其等の教育の伊太利、和蘭、獨逸、英國

米國、等に於ける歴史的發達に就ては獨逸經濟學者 Werner Sombart が其著 *Der Bourgeois* 中に詳述する處也。

吳秀三氏著『シーボルト』中シーボルト先生の郷里の大學にてシーボルト先生の卒業せしウエルツブルク大學に關する記事中に曰く、

ウエルツブルク大學は當時より獨逸有數の大學たり管に當時のみならず千五百八十二年ユーリウス法侯 (Julius Echter von Mespelbrunn) が商業學校と病院を建て土地財賦を寄贈せし以來名譽輩出力を教習に盡して其醫科大學は挺然として四方の大學に超拔し十八世紀の末十九世紀の初には殊に聲譽ありて千八百十四年此府が巴威里に屬せしよりユーリウス、マキシミリアン大學と改稱して名流多く輩出し…… (吳秀三氏著シーボルト第十八頁より第十九頁までの一節)

これに據ればシーボルト先生の郷里には早くより商業學校ありしものの如しと雖も予は其根本資料の確かなるものを未だ手にせざるを遺憾とす。

R. v. d. Borcht 氏著商業及商業政策 (*Handel und Handelspolitik*) 第二部商業政策第二章國內商業政策中商業教育を論じたるうちに、商業教育機關は十八世紀より發達し初めたるも特に注目すべき發達は十九世紀に入りて後の事なり、……獨逸にては十九世紀の前葉には商業學校は未だ少なく一八一四年創立ダンチヒ市 (Danzig) の Handelsakademie 一八一七年 Arnoldi 氏の創立せしゴーター市 (Gotha) の Handlungslehrlingsschule 一八三一年ライプチヒ市 (Leipzig) の die öffentliche Handelslehranstalt 等の創立されたる事を記述すれどもシーボルトの郷里 Würzburg に商業學校の早く存せし事を敘述する事なし (R. v. d. Borcht 氏著書改訂第三版) (第四百二頁より第四百三頁參照)

ウエルツブルク (Würzburg) に於ける技術工業學校 (eene Polytechnische en industrie School) に就ては西曆千八百四十三年 (天保十四年) 和蘭アムステルダム出版和蘭商業雜纂、一名商工業辭典中ウエルツブルク (Würzburg) の部に記述すれど商業學校 (Handels school) がウエルツブルクに存在せし事に就ては云ふ處なし。

以上予が獨逸特にシーボルト先生の郷里ウエルツブルク (Würzburg) に於ける商業學校の歴史を探查せんとせし理由は本來醫學者博物學者たるシーボルト先生が如何にして商業教育に關する知識を得られし乎を知るの資料に供せんが爲め也。上田氏の歐洲商業教育史に關する敘述の批判より移りて予がウエルツブルクの商業學校に就て少しく探求せし所以は上述の理由による諸者之を諒とせられよ。

五

我邦商業教育の歴史に就ては最近東京商科大學商學研究編輯所より大正十一年二月發行の商學研究第一卷第三號に附録として收載されたる法學博士佐野善作先生稿「日本商業教育略史」と題する百三十二頁に亙る長文の精細なる調査研究あり我邦の商業教育史研究者にとりて參考史料として長く價值あるものなるべしと雖も佐野博士の調査は明治維新後商業教育に關する最初の法制と最も早く設立せられたる商業學校より筆を起されしに止り商業學校又商業教育に關する知識の我邦に傳はりし由來、又商業學校設立計劃が明治以前に無かりし乎否乎に就て何等究むる處なかりしが如し。

明治以前我國に長崎の門戸より傳はりたる西曆一八四三年（天保十四年）アムステルダム出版和蘭商業雜纂一名商工業辭典（Nederlandsch Handelsmagazijn, of Algemeen Zamenattend Woordenboek voor Handel en Nijverheid）には商業學校（Handelscholen）商事會社（Handel-Maatschappij）東印度會社（Oost-Indische Kompagnie）簿記（Boekhouden）等の項目あり。

長崎には C. E. Boedinghaus と稱する獨逸生れの商人にて文久三年（西曆千八百六十三年）始めて長崎に來り大正三年（千九百十三年）八十一歳の高齡にて出島にて死せし商人ありき其獨逸商人は本國にて商業學校卒業後帆船に便乘し喜望峯を迂回して百八十七日間の航海後香港に着し、居る事三年の後前述の如く千八百六十三年（文久三年）始めて長崎に來れりこの Boedinghaus は獨逸大哲カント（Immanuel Kant）の人類學（Anthropologie in pragmatischer Hinsicht abgefasst）のフランクフルト及ライプチヒ（Frankfurt und Leipzig）千七百九十九年版を所持せり、（一七九八年ケーニヒ八〇〇年同改訂第二版の中間の別版）これカントの著書の我國に傳はりしものの最初ならんを考へらるゝが同氏は別に文學書歴史地理商業書等を種々研究せり、其内商業書の一としてライプチヒ（Leipzig）一八五五年版の同地商業學校教師（Lehrer an der öffentlichen Handels-Lehranstalt zu Leipzig）たりし Gustav Wagner 及 Fr. A. Strackerjan 氏等著述 Compendium der Münz-, Mass-, Gewichts und Wechselcours-Verhältnisse Sämmtlicher Staaten und Handelsstädte der Erde の如き書物を所藏せり。（今は予之を藏す）明治以前我國に傳はりし蘭文又は獨文等の商業書に就て今茲に深く論及する暇なし他日を期し考證文を發表すべし。

シーボルト先生は第三回日本渡來を果さずナポレオン三世を勸めて一大商事會社を創設する事もたゞナポレオン三世に巴里にて千八百六十六年(慶應二年)の春一回會ひしのみにて同年秋十月十八日突然の病氣にて南獨バイエルン國首府ミュンヘン(München)にて永眠せしかば一大商事會社も成立せず從て長崎に商業學校も設立せられずして終れり。

六

シーボルトが長崎に商業學校を設立する計劃を有せし事に就ては後年出版のシーボルト著日本(Nippon)第一卷所載シーボルト傳に明なり。

今其一節を引用すれば次の如し。

Der erste war die Einführung des deutschen Militärsystems in Japan durch die Engagierung einer Anzahl bayerischer Offiziere und Unteroffiziere als Instruktoren im japanischen Dienst, und das zweite Projekt war die Gründung einer ersatzartigen Handelsgesellschaft, verbunden mit einer Schule für Handelswissenschaften in Nagasaki. (Ph. Fr. von Siebold 著 Nippon 第一卷所載シーボルト傳 XXXI の部参照)

右に記する如くシーボルト先生は第二回歸國後尙日本の爲めに盡さんとして第三回日本渡航を志し或は日本にバイエルン國の陸軍制度を輸入せんとし或は日歐商業交通の爲めに一大商事會社(Handelsgesellschaft)を創設し又其附屬商業學校(Schule für Handelswissenschaften)を設立せんとせり。

シーボルト先生の郷里南獨バイエルン (Bayern) のウエルツブルク市 (Würzburg) に於て曾て催されたるシーボルト先生生誕百年記念祭に際し印刷されたる記念冊子所載シーボルト先生略傳にも前述せし一大商事會社及其附屬商業學校設立計劃の事も述べあるを見る。

シーボルトが長崎に商業學校を創設せんとの計劃を有せし事柄に就ては Dr. J. P. Kleiweg de Zwaan 著『日本及支那に於ける醫術の人種學 (土俗學) 的歴史研究 (Völkerkundliches und geschichtliches über die Heilkunde der Chinesen und Japaner mit Besonderer Berücksichtigung Holländischer Einflüssen, Harlem 1917) 中にもシーボルトの部に右商事會社及商業學校を長崎に設立する事に就て記述す。シーボルト先生の一大商事會社設立計劃は佛蘭西のナポレオン三世 (Napoleon III) を勸めこゝろんとせしものなる事は次に掲ぐる佛國文學者 Alphonse Daudet (1840—1897) 著 Contes du Lundi 第二の部 (Deuxieme Partie) 終末盲帝 (L'empereur aveugle ou Le voyage en Baviere a la Recherche d'une Pragédie Japonaise) 中の一節に明也。

Au printemps de 1866, M. de Siebold, Colonel bavarois au service de la Hollande, bien connu dans le monde scientifique par ses beaux ouvrages sur la flore japonaise, vint à Paris soumettre à l'empereur un vaste projet d'association internationale pour l'exploitation de ce merveilleux Nipon-Japon (Empire-au-Lever-du-Soleil) qu'il avait habité pendant plus de trente ans.

これには商事會社附屬商業學校の事は記述せず。

(附註) 日本悲劇盲帝 (L'empereur Aveugle) とは妹背山婦女庭訓を指し盲帝とは其内の天智天皇を指す妹背山婦女庭訓第

一に「天智天皇の宮居なす奈良の都の冬木立 日の本の聖主たる君萬葉の御身だに聞き盲の御惱」其他參照

シーボルトは西曆千八百二十六年江戸より長崎への歸途大阪滞在 (Aufenthalt zu Osaka) 中此妹背山 (Das Schauspiel

Imose) を觀たる事又盲帝 (Der blinde Mikado) の事を記す (シーボルト著日本第一卷第二百二十三頁)

森鷗外博士著「いけ草」收錄盲帝の曲參照

小泉八雲 (Lafcadio Hearn) の東京帝國大學に於ける佛國文學者 A. Daudet に關する評論中にも Daudet とシーボルトとの關係を敘述せり即ち左の如し。

Daudet has written a great many sketches. Perhaps you do not know that one of them, or a series of them, treat of Japanese subject. In Paris Daudet made the acquaintance of Philipp Franz von Siebold, whose name is well known as a scientific explorer of Japan. Siebold was then trying to interest Napoleon III in the project of a Grete European Commercial Company, to be organized for the purpose of trading with Japan.... Siebold especially delighted Daudet by stories of the Japanese theatre. 'I will give you,' he said to Daudet, a beautiful Japanese tragedy, called 'The Blind Emperor' (Lafcadio Hearn 講 Life and Literature Chapter VII. The prose of small Things 第百十九頁 以下參照)

商事會社の事はあれども商業學校の事は記述せず。

然れどもシーボルト先生は獨り醫學博物學等に止まらず日歐商業交通の爲めに一大商事會社を創立し、夫れに附屬して長崎に商業學校を設立する計劃を有せられしは事實なるが如し、この重要な事柄は今日まで商業教育に關係ある學者教育家又我國商業教育史を草する人々等に依り看過せられたるは甚だ遺憾なり。

昨年八月十一日 (舊曆七月六日) は正に先生が西曆一八二三年 (文政六年) 日本長崎最初の渡來

より百年なりき。されば同年秋十月十一日を期し先生渡來百年記念式を長崎にて舉行する筈なりしが關東震災の爲めに延期し來る本年四月二十七日（日曜）に先生渡來百年記念式を舉行せんとす。これこの稿ある所以也。尙、先生渡來百年記念會にて論文集を出版の舉あるが故に先生に關する詳細の研究は夫等を參照されん事を予は讀者諸彦に切望す。

（附註） Allgemeine Deutsche Biographie 所載シーボルト傳にあるシーボルト第一回日本渡來の年は誤にしてシーボルトは一八二三年（我文政六年）に日本に渡來せり。

附 錄

フイリツプ・フランツ・フオン・ジーボルト略年譜

- 1 西曆一七九六年（我寛政八年）二月十七日南獨逸バイエルン（Bayern）ヴュルツブルク（Würzburg）に生る父ヨハン・ゲナ
ルグ・クリストフ・フオン・シーボルト（Johann Georg Christoph von Siebold）は同地大學教授なりき。
- 2 一八二〇年（我文政三年）生地ヴュルツブルク大學に於てドクトルとなる。同大學にて醫學の外に自然科學土俗學等を學べり。
- 3 一八二二年（文政五年）七月二十一日和蘭東印度會社軍醫に任ぜらる。
- 4 ジーボルトは和蘭東印度商社の第一衛生士官（Chirurg-Major in der Niederländisch-indischen Armee）として任にバタ
ビア（Batavia）に赴く爲め „Jonggen Adriane” なる軍艦に搭じ一八二二年（文政五年）六月同地を發し長崎に向へり。
- 5 一八二三年（文政六年）八月十一日（舊曆七月六日）シーボルト長崎に着す。時に年二十八。
- 6 一八二六年（文政九年）長崎出嶋和蘭商館長に従ひ江戸に赴く。
- 7 一八二八年（文政十一年）十二月（舊曆十一月）長崎を發しバタビアに向はんとせしが輸出禁制品發覺す（地圖、地誌、戦記
刀劍等の類）。
- 8 一八三〇年二月（文政十二年十二月）再渡を禁じて歸國せしむ。
- 9 一八五九年（安政六年）四月獨逸ボン（Bonn）を發し八月再び長崎に來る、日米條約締結せられ次で日蘭新條約成りシーボルト
ト入國の禁解けしが爲也。

- 10 一八六一年(文久元年)シーボルト江戸に召され外國事務の顧問となりしが同年末其任を解かる次でバタビアに召還せらる。
- 11 一八六四年(元治元年)シーボルト瓜哇を去り歐洲に歸り後職を辭し和蘭を去りて故國南獨バイエルンに退隱す。
- 12 一八六六年(慶應二年)十月十八日シーボルト病みて南獨逸バイエルンのミュンヘン(München)に於て永眠す時に七十歳九ヶ月。